

『義経記』に於ける源氏・八幡

徳 竹 由 明

一、はじめに

柳田国男の「粗末なコンクリート」云々⁽¹⁾を持ち出すまでもなく、『義経記』は、義経に関する様々な伝承を雑に寄せ集めた感の強い文芸作品である。そうした『義経記』の特徴もあつてか、研究史を振り返ってみるとそれぞれの伝承の生成の背景を探ることに力点が置かれてきたようにも見える。しかし一方で『義経記』に統一した志向・叙述を見いださずとする試みにもそれなりの蓄積がある⁽²⁾。

筆者もそうした蓄積を受けて、以前拙論に於いて、巻第四「頼朝義経対面の事」、巻第四「義経平家の討手に上り給ふ事」、「腰越の申状の事」、巻第八「秀衡死去の事」、「秀衡が子共判官に謀反の事」、「秀衡が子共御追討の事」を対象として、『義経記』に、源氏を守護する氏神八幡大菩薩の利用、信頼出来ない他人と氏神八幡大菩薩の

誓願「他の人よりも我が人」を背景とした信頼すべき源氏一門との対比、『平家物語』に比した義経・頼朝像の美化といった統一的な志向があることを指摘し、『義経記』が義経と兄頼朝の対立を、そうした志向の下に極力回避・曖昧化していると考察した。³⁾ 本稿ではその延長として、『義経記』に於ける義経・頼朝以外の源氏一門の描かれ方と前稿で考察の対象としなかつた箇所での八幡大菩薩の描かれ方の二点を考察し、ささやかながら旧稿の補強を期したい。

二、『義経記』に於ける源氏一門の描かれ方

それではまず、『義経記』に於ける源氏一門の描かれ方を、「義経と同時代の源氏一門」、「治承寿永期以前の源氏一門」に分けて考えて見たい。

義経と同時代の源氏一門

まずは義経と同時代を生きた源氏一門の描かれ方を、「a・義経と源氏一門との関わり」、「b・源氏一門の最期」、「c・その他」に分けて考察する。

a・義経と源氏一門との関わり

『義経記』内で、義経と義経の同時代を生きた源氏一門との関わりが描かれているのは、以下の九箇所である（なおこの節では、平治の乱で既に死んでいる朝長に関する叙述も、一部便宜的に含めて考察することにする。⁴⁾）。

い・遮那王殿これを聞き給ひて、……十八万騎の勢を十萬騎をば国に留めて、八万騎を率して坂東に打ち出で

て、八ヶ国は源氏に志ある国なり。下野の国は頭殿の国なり。これをはじめとして十二万騎を催して、……
 十萬騎をば伊豆の兵衛佐殿に奉りて、十萬騎をば東山道なる木曾殿に付けて、わが身は越後の国に越えて、……
 (巻第一「遮那王殿鞍馬出の事」)

ろ・長者はらはらと涙を流し、「……この殿の打ち振る舞ひ給へるおもかげ姿、故左馬頭殿次男、中宮大夫殿に少しも違ひ給はぬものかな。もし言葉の末を以て具し奉るかや。保元、平治よりこのかた、源氏の子孫、ここかしこに打ち籠められておはする。成人して思ひ立ち給ふことあらば、よくよく掩へ奉りて具し参らせ給へ。……」(巻第一「鏡の宿吉次が宿に強盗の入る事」)

は・美濃の国青墓宿にぞ着き給ふ。これ義朝の浅からず思ひ給ひける少将が跡なり。兄の中宮大夫の墓所を尋ねておはしまし、夜と共に法華経を誦誦して、明くれば卒塔婆造りて、手づから梵字を書き、供養してぞ通られける。(巻第二「鏡の宿吉次が宿に強盗の入る事」)

に・熱田の前の大宮司は、義朝の舅なり。……兵衛佐殿の母御前も熱田のそのの政所と申す所にておはします。父の御形見と思し召し、吉次をもつて申されければ、……(巻第二「遮那王殿元服の事」)

ほ・「……これは熱田の大明神の御前なり。しかも兵衛佐殿、蒲殿の母御前もこれにおはします。これにて思ひ立たん」とて、精進潔斎して大明神へ参り給ふ。大宮司も御供す。(巻第一「遮那王殿元服の事」)

へ・阿濃禅師の御もとへ御使ひをぞ奉り給ひける。禅師大きに悦びて、御曹司を入れ奉り、互ひに御目見あはせて、過ぎにし方の事ども語りつづけて、御涙にむせび給ひけり。「……兵衛佐殿も伊豆の北条におはしませども、伊東の者どもきびしく守護し奉ると申せば、それも叶はず。近きばかりを名のみにて音信なし。御身とてもこの度見参し給はん事も不定なれば、文ばかりを書きて置き給へ。その様申すべく候」と仰せられ

ければ、御文書きて阿濃に留め置き、その日は伊豆の国府に着き給ふ。(巻第一「阿濃禪師に御対面の事」)
 と・伊勢三郎がもとへおはしまして、しばらく休らひて、東山道にかかりて、木曾冠者のもとにましまして、

謀反の次第仰せられあはせて、やがて都に上り、……(巻第二「義経鬼一法眼が所へ御出の事」)

ち・御曹司、……東山道にかかりて、木曾がもとにおはして、「都の住居叶はぬ間、奥州へこそ下り候へ。かくて御渡り候へば、万事は頼もしくこそ思ひ奉れ。東国北国の兵を催し給へ。義経も奥州より差し合はせて、疾く疾く本意を遂げ候はんとこそ思ひ候へ。これは伊豆の国近く候へば、常に兵衛佐殿の方へも御訪れ候へ」とて、木曾がもとより送られて、上野の国の伊勢三郎がもとまでおはして、それより義盛御供して平泉へ下られけり。(巻第三「弁慶義経に君臣の契約申す事」)

り・判官は叔父の備前守を伴ひて、十一月三日都を出で給ふ。(巻第四「義経都落の事」)

いは金商人吉次から奥州と源氏との関係や奥州藤原氏の様子を聞いた義経の独白、そこから、いずれも吉次との奥州下向の途路での記事、と・ちは一度奥州へ下った義経が再上京・再下向する際の記事、りは兄頼朝と仲違いをした義経が叔父行家を伴って都落ちする場面である。まず吉次との奥州下向の記事を見ていくと、ろ・はでは鏡・青墓で亡兄朝長との所縁が、に・ほでは熱田で兄頼朝・範頼の母との所縁が語られ、へでは駿河浮島が原で同腹の兄阿濃禪師との対面を果たして阿濃禪師に頼朝への手紙を託しており、義経は自らの兄弟の所縁(は・には点線部の如く亡父の所縁でもある)・居所を辿っている。こうした記述は、

・吉次、やう／＼下るほどに、美濃の国に聞えたる、青墓の長者の宿所に着く。……去問、牛若殿、座敷に直らせ給ふ。長、此由を御覽じて、「あらず思議の冠者殿や。座敷に直る風情は、義朝に違はず。御目の内は、ひとへに悪源太にて御座候ふ。物の給ふ声色は、朝長に違はず。もしも源氏のゆかりかゝりにてま

しまさば、はやく御名乗候へや。(舞の本「烏帽子折」)

・駿河国黄瀬川へ着て、「北条へよらん」との給へば、「父にて候深栖は見参に入て候へ共、重頼はいまだ見参にいらす。先、国へ落着せ給ひて、御文にて御申候へ」と申せば、「よかりなん」とて通りけり。深栖、状をもて此よしを兵衛佐殿へ申たりければ、「さる者候。あひかまへて、不便にし給へ」とぞ、返事には有ける。(学習院大学図書館蔵『平治物語』巻下「牛若奥州下りの事」)

といった、舞の本「烏帽子折」の青臺の宿の長者が義経に義朝・義平・朝長の面影を見るといふ記述(なお鏡の宿では鎌田正清の妹と邂逅)、或いは『平治物語』の駿河黄瀬川で同行者陵に頼朝に会いに行くことを望んだところ後日手紙を出すように言われたとする簡略な記述の他は、管見の限り他の中世文芸には見られない。⁴『義経記』に於ける義経の奥州下りは、執拗に兄弟に関係のある地を辿る旅でもあると言えよう。また注目すべきは義経と木曾義仲との関わりである。いでは頼朝のみならず義仲に対してまでも同族意識が語られ、と・ちでは平泉と京の往復の経路としてわざわざ東山道を通り、その途路に木曾に立ち寄って謀叛の相談をする等義仲と協調する姿が描かれ、さらにちでは義仲に頼朝との協調をも求めている。こうした記述も、管見に入る限り他の中世文芸には見られない。特にと・ちは、補入された感の強い鬼一法眼関連譚・弁慶関連譚とその前後を繋ぐ部分であるので、恐らくは『義経記』編者によって接合のために描かれた箇所であり、編者の意識を垣間見ることが出来るのではないか。とにかく、『義経記』に於ける挙兵以前の義経の京と奥州との往来では、義経と源氏一門との関わりが強調されているといっても良いであろう。

b・源氏一門の最期

続いて義経と同時代を生きた源氏一門の最期に触れた箇所である。基本的には以下に引用する義経の兄之若以

外、源氏一門の最期は描かれない。

ぬ・今若八歳と申す春の頃より、くはんぜう寺にのぼせ、学問せさせ、十八の年受戒して、禪師の君とぞ申しける。後には駿河の国富士の裾に、阿野と申す寺に、仏法興隆しておはしけるが、悪禪師殿とぞ申しける。乙若八条におはしけるが、憎なれども、腹あしく恐ろしき人にて、賀茂、春日、稻荷、祇園の御祭ことに、平家を狙ひ、後には紀伊の国にありける叔父新宮十郎行家、世を乱りし時、東海道墨俣川にて討たれけり。

(巻第一「常盤都落の事」)

そもそも義経の一代記的な作品である『義経記』では、義経と関わりのある形で死なない限り、その最期を積極的に描く必要もないのであろう。但し唯一の例外として、木曾義仲の最期については義経自身が係わっている。寿永三(一一八四)年一月の義経と義仲の宇治川の合戦・河原合戦から粟津での義仲の敗死に至る経緯は『平家物語』巻第九に詳しい他、『平治物語』・『源平盛衰記』・舞の本「未来記」に、

・ 其後、木曾追討の為に、蒲冠者範頼・九郎冠者二人、兄弟をさしのぼせらる。木曾を追討して、一谷の合戦にうちかち、……(学習院大学図書館蔵『平治物語』巻下「頼朝義兵を挙げらるる事並平家退治の事」)
 ・ ……源氏跡を失事、二十一年也。今又平家の宿運盡て、源家世を取。中に木曾冠者義仲、朝威を軽しめ、過分の故に義経手を下して、義仲を誅す。是義経が奉公の始なり。(『源平盛衰記』巻第四十六「義経行家出都」)

・ 其時、範頼、義経両大将と定め、都へ攻めて上るべし。無残やな、義仲は、天下の憎まれ、朝威の罰、弓矢の末も靡り果て、粟津が原で討たるべし。義経都の警固として、……三草の峠嶋越、搦手を廻ひて攻め廻る。(舞の本「未来記」)

とある如く、木曾義仲の追討は、中世文芸の中で義経の事績として余りにも著名なものであった。⁽³⁾ さて『義経記』内には、義経の大凡の事績を語る箇所が以下の四箇所ある。

る・かくて御曹司軍の手合はせに海道の軍に討ち勝つて、同じく寿永三年に上洛して、平家を追ひ落とし、一の谷、八島、壇の浦、一途の忠を致し、先を駆け身を碎き、終に平家を攻め亡ぼして、……（巻第四「義経平家の討手に上り給ふ事」）

を・かくて武勇の達者、一度も慣れ給はぬ舟軍にも風波を恐れず、舟端を走り給ふ事、鳥の如し。一の谷の合戦にも……（中略）……今度八島の軍に、……（中略）……壇の浦の詰軍までも終に弱げを見せ給はず、……（巻第四「義経平家の討手に上り給ふ事」）

わ・然るを幸慶忽ちに熟して、平家の一族追討の為に上洛せしめ、手合はせに木曾義仲を誅戮の後、平家を攻め傾けん為に、ある時は峨々とある巖石に向かひ駒に鞭を打ち、……（巻第四「腰越の申状の事」）

か・治承四年の秋の頃、奥州より馬の腹筋を馳せ切りて、駿河の国浮島が原に追つて、一方の大將軍請け取りて、一張の弓を脇に挟み、三尺の剣を佩いて、西海に漂ひ、山を家とし、命を捨て身を忘れ、何時か平家を討ち落として、兵衛佐殿をせめて一兩年世にあらせ奉らばやと骨髓を碎き給ひしに、（巻第六「関東より勸修坊を召さるる事」）

るは頼朝義経の対面と腰越関連譚を繋ぐ一文、をは梶原景時の讒言、わは「腰越状」の一部、かは関東に召された勸修坊の発話であるが、わ以外は木曾義仲追討について一切触れない。る・を・かは、管見の限り、何れも『平家物語』諸本を含めて他の中世文芸中には見られない。『義経記』独自の記述である。『義経記』編者が義経による木曾義仲追討について知らなかったとは考えられず、源氏同士の内訌である木曾義仲追討について意図的に

書かなかった可能性が高いと言えるであろう。わの「腰越状」に義仲追討が記されているのは、そもそも「腰越状」が他書からの引用であり、編者は手を付けなかったのではないか。

c・その他

以下、義経と同時代を生きた源氏一門について、二点の補足を加えたい。まずは義経が金商人吉次と共に奥州へと下る途次に下総国下河辺で出会い、義経への助力を渋ったために館を焼かれてしまつた陵兵衛についてである。

よ・「この庄の領主は誰がしといふぞ」と。少納言入道信西と申す人の叔父、陵介と申す人の嫡子、陵兵衛と申し候」。(巻第二「阿濃禅師にこ対面の事」)

右に引用した箇所は、陵について義経に吉次がその系譜を語る場面であるが、陵は藤原信西の縁者として紹介されている。しかし『平治物語』や『尊卑分脈』では陵は、

・「深栖三郎光重が子に、陵助重頼といふ不肖の身にて候へ共、源家の末葉にて候」。「さては、さうなき人ごさんなれ。誰と申つけたまはり給ふ」「兵庫頭頼政とこそ昵候へ」(学習院大学図書館蔵『平治物語』巻下

「牛若奥州下りの事」)

・光重 深栖三郎。仲政子、頼政頼行等弟。實者「源」光信子也。為猶子。住下野國方西、号波多野御曹

司——頼重 諸陵頭。皇后宮侍長。堀三郎。(『尊卑分脈』「清和源氏」)

と清和源氏とされている。⁷⁾ それに対して何故『義経記』では清和源氏としなかったのか。『平治物語』では奥州へと下る若き日の義経の助力者として描かれていたのが、『義経記』では逆に義経への助力を渋る者とされていることと関連があるのかも知れない。次に義経が都落ちした際義経に戦いを挑む摂津の手島藏人である。

た・「……この浦にぞ着き給はんすらんとて、当国の住人、手島藏人、上野判官、小溝太郎承りて、陸には五

百疋の名馬に貝鞍を付け、磯には三十艘の杉舟に搔櫓をかき、判官を待ちかけたところに、……」（巻第四「義経都落の事」）

この手島藏人であるが、『尊卑分脈』や『平家物語』では、

・頼盛子。行綱〔筆者註・多田藏人〕弟 高頼 号能瀬三郎。皇嘉門院藏人（『尊卑分脈』「清和源氏」）
 ・「……撰津国には、多田藏人行綱こそ候へども、……かへり忠したる不当人で候へば申に及ばず。さりな

がら、其弟多田二郎朝実・手島の冠者高頼、太田太郎頼基、……」（『平家物語』巻第四「源氏揃」）
 と清和源氏とされる。なお『平家物語』で都落ちした義経を襲うのは、太田太郎頼基だが、

・撰津国源氏、太田太郎頼基、「わが門の前をとをしながら、矢一射かけであるべきか」とて、川原津といふ所に追ツついで攻めたゝかふ。（『平家物語』巻第十二「判官都落」）

と清和源氏であることを明示する。一方『義経記』では、たの直前に、公卿詮議での発言として「義経に宣言を賜び下して、近国の源氏共に仰せ付けられて、大物にて討たせらるべくや候ふらん」とありながら、住吉大物で待ち構える人物のうち唯一清和源氏であることが確認できる手島藏人を、ただ「当国の住人」としか記さない。或いは義経の敵対者であるので、敢えて清和源氏であることを記さなかったのかも知れない。

治承寿永期以前の源氏一門

続いて、義経よりも前の時代に生きた源氏一門の描かれ方について、「a、保元・平治の乱期の源氏一門」、
 「b、保元・平治の乱以前の源氏一門」に分けて考えて見よう。

a・保元・平治の乱期の源氏一門

まずは、保元・平治の乱期の源氏一門の描かれ方である。以下に当該箇所を引用する。

A・父義朝は、平治元年十二月廿七日に、衛門督藤原信頼に与して、京の軍に打ち負け、重代の郎等ども、皆討たれしかば、その勢三十余騎になりて、東国の方へぞ落ちける。成人の子共引き具し、幼きをば都に棄て置きてぞ落ち行きける。嫡子鎌倉の悪源太義平、次男中宮大夫進朝長十六、三男兵衛佐頼朝十二になる。悪源大をば北国の勢を具せよとて、越前の浦へ下す。それも叶はざりけるにや、近江の国石山寺に籠り居たりけるを、平家聞きつけて、妹尾、難波次郎を差し遣はして、生け捕りにして都へ上り、六条河原にて、ぢきに斬られにけり。弟の朝長も千束が崖と申す所にて、山法師大矢の注記が射ける矢に、弓手の膝射られて、美濃の国に青墓といふ所にて死ににけり。そのほか子共腹々に数多ある。尾張の国熱田の大宮司の娘の腹にも子あり。遠江蒲といふ所にて成人したりければ、蒲の御曹司とぞ申しける。後には三河守これなり。九条の雑仕常盤腹にも三人あり。今若七つ乙若五つ牛若当歳なり。(巻第一「義朝都落の事」)

B・正近廿一の年、思ひけるは、保元に為義誅せられ給ひ、平治に義朝討たれ給ひて後は、子孫絶えはてて、弓馬の名を埋みて星霜を送り給ふ。(巻第一「少進坊の事」)

C・……平家なほ都に繁昌して源氏空しかるべくは、命をば左馬頭に奉り、名をば後代に留め、屍を内裏に曝さんこと、身にとつては何の不足かあらんと思ひ立ち給ふも、十六の盛りには恐ろしくぞ覚えける。(巻第一「遮那王殿鞍馬出の事」)

D・吉次に仰せられるは、「左馬頭殿は子共数多持ち給へり。嫡子悪源太義平、次男中宮大夫朝長、三男兵衛佐頼朝、四郎は蒲殿、五郎は禅師の君、六郎は卿の君、七郎は悪禅師の君、我は左馬の八郎とこそ言はる

べけれども、保元の合戦に、叔父鎮西八郎弓矢を取つて名を流し給ひし事なれば、その跡を継がんことも由なし。末になるとも苦しかるまじ。我は左馬の九郎と呼ばれん。実名は、祖父為義、父は義朝、先は義平と申しければ、我は義経と言はれん」とて、昨日までは遮那王殿、今日は左馬の九郎義経と名を改めて、熱田の宮を打ち出で給ふ。(巻第二「遮那王殿元服の事」)

E・「……今御辺を待ち付け参らせて候へば、故頭殿の生き返らせ給ひたるやうにこそ存じ候へ。……今日より後は、魚と水との如くにして、先祖の恥を清め、亡魂の憤りを休めんとは思し召されずや。御同心に候はば尤も然るべし」(巻第四「頼朝義経対面の事」)

F・「……御謀反の由承り、取る物も取り敢へず馳せ参る。今君を見奉り候へば、故頭殿の御見参に参り候ふ心地してこそ存じ候へ。命をば故頭殿に参らせ、身をは君に参らす上は、いかが仰せに従ひ参らせでは候ふべき」と申されけるこそ哀れなれ。(巻第四「頼朝義経対面の事」)

G・判官、「先祖の恥を清め、亡魂の憤りを休め奉ることは本意なれども、随分二位殿の気色に相叶ひ奉らんとてこそ、身を砕きては振る舞ひしか。……」(巻第四「義経平家の討手に上り給ふ事」)

H・「天神七代地神五代は、神の御代、神武天皇より四十一代の帝より以来、保元、平治とて両度の合戦に如かず。これら両度にも鎮西八郎御曹司こそ、五人張に十五束を射給ひ名を揚げ給ひし。それより後は絶えて久しくなりたり。さては源氏の郎等の中に、弁慶こそ形の如くも弓矢取つて人数には言はれたれ。……」

(巻第四「義経都落の事」)

I・「……四郎兵衛これを見て、「はしたなく射つるものかな。保元の合戦の時、鎮西の御曹司の七人張に十五束を以て遊ばしたりしに、鎧着たる者を、主とも堪らず二人を射落としてこそ弓矢に名をば揚げ給ひしか。

それは上古の事、未代にはいかでかこれ程の弓勢あるべしとも覚えず。一の矢を射損じつ。二の矢は直中射んとぞ思ふらん。胴中射られては叶はじ」と思ひければ、……（巻第五「忠信吉野山の合戦の事」）

「J」……平治に御辺の父下野の左馬頭、衛門督に与して、京の軍に打ち負けて、東国の方へ落ち給ひし時、義平も斬られぬ、朝長も死にぬ。明るる睦月の初めに、父も討たれしに、御辺の命を死にかねて、美濃の国伊吹山の辺にて迷ひ歩き、麓の者共に生け捕られて、都まで引き上げ、源氏の名を流し、既に誅せられ給ふべかりしが、……」（巻第六「関東より勸修坊を召さるる事」）

Aは物語の冒頭、序に続き平治の乱の結末が語られる箇所、Bは鎌田正清の遺児少進坊の独白、Cは奥州下向を志した義経の独白、Dは義経元服時の発話、Eは義経頼朝対面時の頼朝の発話、Fは頼朝義経対面時の義経の発話、Gは腰越に留められた義経の恨み言、Hは西国落ちの際の嵐を平家の怨霊故と看破した弁慶の発話、Iは吉野にただ一人残った佐藤忠信の発話、Jは関東に召された勸修坊の発話である。まずC・E・F・Gを見てみよう。頼朝義経共に、平治の乱で敗死した父義朝及び先祖・亡魂への思いをくりかえし吐露している。またD・H・Iでは叔父である鎮西八郎為朝が弓の名人として称揚されている。しかしその他の源氏一門に関しては、祖父為義にしても長兄惠源太義平にしてもA・B・Iのように、名前や死んだことが記される程度で、『義経記』としては然程興味関心が払われているとは言いがたいようにも見える。村上学氏は『義経記』の「序」（次節Kに引用）についての考察で、「名をのみ聞きて目には見えず」といった過去の人物ではなく、「目のあたりに芸を世にほどこし、万人の目をおどろかし給ひし」人物、即ち義経の時代の人物に対しての興味関心を表明していると指摘しているが、そうした『義経記』全体の視点と関係があるのかもしれない。

b・保元・平治の乱以前の源氏一門

続いて、保元・平治の乱以前の源氏一門の描かれ方である。以下に該当箇所を引用する。

K・本朝の昔をたづぬるに、田村、利仁、将門、純友、保昌、頼光、漢の樊噲、陳平、張良は、武勇といへども、名をのみ聞きて目には見ず。目のあたりに芸を世にほどこし、万人の目をおどろかし給ひしは、下野の左馬頭義朝の末の子、源九郎義経とて、我が朝にならびなき名將軍にてぞおはしける。(巻第一「義朝都落の事」)

L・「……公卿僉議ありて、『これは天命を背くにこそ候へ。源平の大将を下し、追討せさせ給ひ候へ』と申されければ、源頼義勅宣を承つて、十一万騎の軍兵を率して、阿倍を追討の為に、陸奥の国へ下り給ふ。……

源氏の十一万騎も皆討たれて、叶はじとや思しけん、頼義上洛して内裏へ参り、『頼義叶ふまじく候』と申されければ、『汝叶はずは、代官を下して、急ぎ追討せよ』と重ねて宣旨下りければ、急ぎ六条堀川の宿所に歸りて、十三になり給ひける子息を大内へ参らせ給ふ。『汝が名をは何といふぞ』と御尋ねありけるに、『……名をばくはつた』と申したりければ、『無官の者の合戦の大將する例なし。元服せさせよ』とて、『……八幡へ参らせ、元服せさせて、八幡太郎義家と号せさせ。その時内裏より賜りたる鎧をこそ、くはつたが産衣と申しけれ。秩父十郎重国が先陣を賜りて、奥州へ打ち下り、……義家都へ馳せ上り、内裏の見参に入りて、未代までの名をあげ給ふ。……』(巻第一「吉次が奥州物語の事」)

M・「……我らが先祖、八幡殿二三年の合戦に、むなつの城を攻められしに、大勢皆亡ぼされて、無勢になりて、厨川の端に降り下りて、幣帛を捧げて、王城を伏し拜む。『南無八幡大菩薩と御覚えを改めず、今度の寿命を助けて、本意を遂げさせて賜へ』と祈誓せられければ、まことに八幡大菩薩感応にやありけん、都に

おはする八幡殿の御弟、刑部少輔義光、……二百余騎にて馳せ下られける。路次の勢打ち加はり、三千余騎にて、厨川の端に馳せ来たつて、八幡殿と一つになりて、終に奥州を従へけり。……」（巻第四「頼朝義経対面の事」）

N・「……かく言ふ者は、誰とか思ふ。清和天皇に十代の御末、八幡殿には四代の孫、鎌倉殿の御弟、九郎大夫判官の御内に、十郎権頭兼房、元は久我大臣殿の侍、今は源氏の郎等、樊噲を欺く程の剛の者、……」（巻第八「兼房が最期の事」）

Kは物語の冒頭、『義経記』の「序」に当たる部分で、義経の遠い祖先に当たる源頼光の名が、共に酒吞童子を退治した藤原保昌と共に見える。続いてLは義経を奥州平泉へ連れて行くことを企図した金商人吉次が、Mは富士川の合戦の前に義経との対面を果たした頼朝が、奥州合戦での源氏の故事を語る場面、Nは義経自害後最期の戦いを前にした兼房の名乗りである。まずLは頼義義家父子が登場しながら引用外の箇所では鎌倉・三浦等後三年合戦時の武者の活躍が語られており、またMは『陸奥話記』で著名な、前九年合戦で清原武則が頼義義家父子に加勢した際の「於是、武則、遙拝皇城、誓天地言、臣既発子弟、応將軍命。志在立節、不顧殺身。若不苟死、必不空生。八幡三所、照臣中舟。若惜身命不致死力者、必中神鎬先死矣」という故事が、後三年合戦の義家義光兄弟再会の記事に利用されていると考えられるものであり、いずれも前九年合戦と後三年合戦の故事が一体化した合戦譚である。この前九年合戦と後三年合戦の故事の一体化が『義経記』の依拠資料の問題なのか、『義経記』編者の手に依るものなのかは判然としないが、注目すべきはLでは頼義が合戦に負けて戦争を放棄し、代わりに登場した義家が阿部氏を滅ぼして名を上げている点、Mにはそもそも頼義が登場していない点で、共に頼義ではなく義家が主体となっている点である。Nで兼房が頼朝・義経の系譜を頼義ではなく義家から語っている点と合

わせて、川合康氏が論じるような「足利氏による源氏嫡流工作」のための義家称揚の影響をつけたもの、即ち『義経記』の成立が南北朝時代より確実に降るものであることの証左となるのではないか。

三六 『義経記』に於ける八幡大菩薩

最後に、『義経記』に於ける八幡大菩薩の描かれ方について考察してみよう。『義経記』中の八幡大菩薩については、既に中村和子氏・三澤裕子氏が源氏の氏神として意識されていることを指摘され、また拙論に於いて八幡大菩薩の描写が物語の展開に大きく関わっている箇所があることを指摘した。さて中村氏・三澤氏・拙論で対象とされている巻第一「牛若貫船詣の事」一例、巻第三「頼朝謀反の事」一例、巻第四「頼朝義経対面の事」一例、巻第四「義経平家の討手に上り給ふ事」一例、巻第四「義経都落の事」一例、巻第五「吉野法師判官を追ひかけ奉る事」一例、巻第六「静鎌倉へ下る事」一例、巻第六「静若宮八幡宮へ参詣の事」一例、巻第七「三の口の関通り給ふ事」二例、巻第七「直江の津にて笈探されし事」一例、巻第七「亀割山にて御産の事」一例、巻第八「秀衡が子共御追討の事」一例の計十三例を除き、『義経記』で八幡大菩薩に関する記述があるのは、見落としがなければ以下の1から14である。

1. ……後藤内則明差し添へられて、八幡へ参らせ、元服せさせて、八幡太郎義家と号せさせ。(巻第一「吉次が奥州物語の事」)

2. ……心に物思ひ候ひつる、君の見参に入りて候ひぬること、三世の契りと申しながら、八幡大菩薩の御引き合わせとこそ存じ候へ」とて、……(巻第二「伊勢三郎義経の臣下にはじめて成る事」)

- 3・「さればこそ過ぎにし頃、白き鳩二つ来たりて、秀衡が家の内に飛び入ると夢見たりしかば、源氏の御訪れ承らんずらんと思ひたれば、頭殿の公達の御下りあるこそ嬉しけれ、搔き起こせ」とて、……（巻第二「義経はじめて秀衡に対面の事」）
- 4・「……西天竺の黄石が子は、孕まれて二百年、武内大臣は腹の中にて八十年の齢を送り、白髪生ひて生れける。年は二百八十歳、丈低く色黒くして、世の人には似ず。されども八幡大菩薩の御使者、現人神と齋はれ給ふ。……（巻第三「弁慶生まるる事」）
- 5・「……その夜はたちくちの大明神の御前に通夜ありて、夜と共に祈誓をぞ申されける。……源に同じ流れの岩清水ただ堰き上げよ雲の上まで、兵衛佐殿夢打ち覚めて、明神を三度拝し奉りて、源に同じ流れぞ岩清水堰き上げて賜へ雲の上までと申して、……（巻第三「頼朝謀反の事」）
- 6・「……熊野の宝印の裏に三枚、御前にて自筆に血を出だして書く。一枚をば八幡宮に納む。一枚は熊野に納む。一枚をば焼きて正尊が六根にぞ納めける。「この上は」とて、土佐坊は赦されぬ。（巻第四「土佐坊義経の討手に上る事」）
- 7・「……山と坊の間、一丈ばかりには過ぎざりけり。「これ程の所を跳ね損じて死ぬる程の業になりては力及ばぬことなり。八幡大菩薩、知見を垂れ給へ」と祈誓して、えい声を出だして跳ねたりければ、……（巻第五「忠信吉野山の合戦の事」）
- 8・「されども後代の例しとて、首をばかけよ」とぞ仰せける。堀弥太郎承りて、雑色に持たせて、由比の浜に八幡の鳥居の東にぞかけられける（巻第六「忠信が首鎌倉へ下る事」）
- 9・磯禪師申しけるは、「……御身安穩ならば、若宮へ参らんと、予ての宿願なれば、争でか徒は上り給ふべ

き。八幡はあら血を五十一日忌ませ給ふなれば、精進潔斎してこそ参り給はめ。その程はこれにて日数をこそ」とて、日数を待つ。(巻第六「静若宮八幡宮へ参詣の事」)

10・静これを聞きて、実にもとや思ひけん。磯禪師を呼びて、「いかがあるべき」と言ひければ、禪師も、あはれさもあらまほしく思ひければ、「これ(筆者註・工藤祐経の妻の参詣を勧める発言)は八幡の御託宣にてこそ候へ。これ程これ程深く思し召しける嬉しさよ。疾く疾く参らせ給へ」とぞ申しける。(巻第六「静若宮八幡宮へ参詣の事」)

11・谷々小路々々静が舞ふなるとて、若宮には門前市をなす。(巻第六「静若宮八幡宮へ参詣の事」)

12・……義連承りて、急度の事なりければ、若宮の修理の為に積み置かれたる材木を、一時に運ばせて、高さ三尺に舞台を張りて、……(巻第六「静若宮八幡宮へ参詣の事」)

13・静これを見て、「我祿を取らん為にも舞ひたらばこそ、判官殿の御祈りの為にこそ舞ひたれ」。長持をば一枝も残さず若宮の修理の為に参らせけり。小袖、直垂も一つも散らさず、皆我が君の孝養の為に大御堂へ参らす。(巻六「静若宮八幡宮へ参詣の事」)

14・弁慶判官殿の御袖を控へ、「何時まで君を庇ひ申さんとて、現在の御主を打ち奉りつるぞ。天の恐れも恐ろしや。八幡大菩薩も許し御納受し給へ」とて、さしも猛き弁慶、さめざめと泣きけり。(巻第七「如意の渡にて義経を弁慶打ち奉る事」)

1は吉次によって奥州での合戦譚が語られる場面、2は義経と伊勢三郎義盛との出会いでの義盛の発話、3は義経の平泉着到を聞いた藤原秀衡の発話、4は母の長期妊娠の後に出生した弁慶を忌避する熊野の別当に対して弁慶を擁護する別当の妹の発話、5は安房に敗走した頼朝と「たちくちの大明神」との和歌の遣り取り、6は義

経追討のため上洛した土佐房が義経の疑いを解くため起請文を書く場面、7は佐藤忠信が吉野でただ一人残って合戦を遂げる場面、8は忠信の首が晒される場面、9から13は鎌倉に召された静の若宮八幡参詣譚、14は如意の渡にて義経を打った後の弁慶の発話である。先行論文で既に触れられている箇所をも併せて見てみると、粗密はあるものの巻第一から巻第八まで全ての巻に八幡大菩薩についての記述が見られる。これは八幡大菩薩に関する問題が、例えば巻第二の鬼一法眼関連譚・巻第三の弁慶関連譚に五条天神への祈誓が多く記述されているというような伝承の場・生成背景・依拠資料に由来するであろう問題とは、一線を画すべきものであることを示唆しているであろう（ただ巻第六については、8の忠信の首関連の記事、9から13までの静の若宮八幡参詣譚と八幡大菩薩に関する記述が多いが、これは舞台がいずれも鎌倉であるからであり、巻第二・三の五条天神の問題に近いように思われる）。

さて2では、義経と『義経記』に於いては源氏の譜代相伝とされる郎等の伊勢三郎義盛との出会いが、八幡大菩薩の引き合わせであるとされる。また3では、秀衡の許に義経がやってくる予兆として、八幡大菩薩の使いである白い鳩がやって来るといふ霊夢が描かれている。また14では弁慶が主君義経を打ち据えたことの赦免を、山伏であるにもかかわらず、修験に関連の深い神仏ではなく八幡大菩薩に請願している。このようにやはり『義経記』全体としては八幡大菩薩に対する志向があり、またその背景には八幡大菩薩が源氏を守護すべきき神であるというイメージが強く意識されているといえるのではないか。

また巻第八の義経滅亡関連譚には八幡大菩薩に関する記述が一例も見当たらない。これは、或いは依拠資料の問題かもしれないが、八幡大菩薩の加護があると義経が滅亡し得ない、つまり物語が進展し得ないからという可能性もあるのかもしれない。さらに巻第二から巻第三にかけての鬼一法眼関連譚・弁慶関連譚には、八幡大菩薩

に関する記述が4の一例しか見当たらない。これは『義経記』編者が義経による兵法と股肱の臣弁慶獲得のために、やや強引に両譚を補入した痕跡といえるものかも知れない。しかしそれでも、4と4に対応する『弁慶物語』・『しぞり弁慶』の弁慶出生の場面と比較すると、

・老子といふ人は七十年が間胎内に居て、鬢髭白くなりて生れたると承る。(チエスターピーティライブラリー蔵『弁慶物語』上)

・しやか佛の御子らごらそんじやは、たいないに六年おはしましてむまれ給ふ、もろこしのらうしと申せし人は、たいないにやとり給ふ事六十年、びんひげしろくなりてむまれ給へり、又わか朝のしやうとく太しは、たいないにて物をの給しといへり、(岩瀬文庫蔵奈良絵本『しぞり弁慶』上)

という具合で、弁慶の異常出生に武内宿禰のそれが準えられているのは、『義経記』のみであり、その宿禰を「八幡大菩薩の御使者、現人神」としている点(弁慶が義経にとつての宿禰であり「八幡大菩薩の御使者」ということになるのである)は、前後の八幡大菩薩に関する記述の在り方、即ち八幡大菩薩が源氏の氏神として意識され、時には物語の展開に大きく関わるといふ在り方に通じているのではないか。前章で考察した義経と義仲との二度の対面が鬼一法眼閔連譚・弁慶閔連譚の前後であることも併せ鑑みるに、鬼一法眼閔連譚・弁慶閔連譚は、『義経記』編者のそれなりに統一した志向・叙述の下に補入されたものと考えても良いのではないだろうか。

四、おわりに

以上、『義経記』に於ける源氏一門、及び八幡大菩薩の描かれ方を概括してきた。

歴史的事実として奥州平泉で非業の死を遂げた義経は、中世に於いては恐らくは御霊であつたはずで、同情・鎮魂の対象であつたはずである。¹⁴一方その兄にして義経を死に追いやつた頼朝も、中世に於いては武家政権の創始者として神聖不可侵の存在であつた。¹⁵前稿では、『義経記』は可能な限りその両者の併存を計るという意識の下で、既に様々な形で出来ていた義経の伝承・言説を、氏神八幡大菩薩を多用しつつ、その誓願「他の国よりも我が国、他の人よりも我が人」の下に可能な限り尊重し合う源氏一門の義経・頼朝像を造形する等して、頼朝義経兄頼の対立を極力回避・曖昧化する形で編纂されたものであると論じた。本稿もそうした前稿の論旨の延長線上に立つて（一部論旨からは逸れた節もあるが）、大凡『義経記』に於いて、義経の亡父義朝への思いや同時代の源氏一門との所縁を大切にし協調する姿が描かれている点、八幡大菩薩が源氏を守護する氏神として意識されている点を、少しは明らかにし得たのではないだろうか。

註

(1) 『義経記成長の時代』、『中央公論』四一—一〇—一九二六年一〇月、『定本柳田国男集』七—一九六二年一月、筑摩書房等に再録。

(2) 村上学氏「語り物の諸相」、『日本文学新史』中世—一九八五年十二月、至文堂、『義経記作者の意識に関する三つの断章』、『松村博司先生喜寿記念国語国文学論集』一九八六年一月、右文書院、小林美和氏「『義経記』の表現類型——人物表象をめぐって——」、『青須我波良』三六一—一九八八年二月、『義経記』覚書——物語作者の所在——（『帝塚山短期大学紀要』二六—一九八九年三月）共に「語りの中世文芸——牙を磨く象のように——」（一九九四年六月、和泉書院）に再録、三澤裕子氏「『義経記』成立論の問題点」（『軍記文学研究叢書十一』『曾我・義経記の世界』一九九七年十二月、汲古書院）他、最近のものとしては『数本勝治氏の一連の論考を納めた『義経記』権威と逸脱の力学』（二〇一五

年十一月 和泉書院)がある。

- (3) 『義経・奥州藤原氏滅亡の経緯と頼朝——『義経記』なりの理屈——』(長谷川端氏編、論集太平記の時代) 二〇〇四年四月 新典社)、『義経記』に於ける頼朝義経兄弟不和の発端』(『中京大学文学部紀要』三九 三・四 二〇〇五年三月)、『『義経記』に於ける頼朝義経兄弟対面』(『国語国文』七五 六 二〇〇六年六月)。
- (4) 古活字本『平治物語』巻下「牛若奥州下りの事」に学習院大学図書館蔵本とほぼ同内容の記述あり。『弁慶物語』諸本・『浄瑠璃十二段草子』諸本・『天狗の内裏』諸本・『判官みやこはなし』・『奈良絵本』橋弁慶・『奈良絵本』しじり弁慶・『幸若舞曲』くらま出・舞の本「未来記」の奥州下向箇所を確認したが、義経の兄弟との所縁は語られていない。
- (5) 古活字本『平治物語』巻下「頼朝義兵を挙げらるる事並平家退治の事」に学習院大学図書館蔵本とほぼ同内容の記述あり。一方で『幸若舞曲』くらま出「夫よりも牛若殿 奥へ下らせひて 天下を治め給ひけり」、舞の本「烏帽子折」「それよりも源 奥へ下らせ給ひて、天下を治め給ひけり」、チェスタービーターライブラリー蔵『弁慶物語』下「ほどなく都へ上り給ふ。三年の間に平家を平らげ、源氏一党の御代となし給ふは、九郎義経、弁慶が謀とぞ申しける」なお古活字本・国会図書館蔵元和写本は義経の事跡語らず、『判官みやこはなし』(『御ざうし』のちに、みやこへのほり。御よにいで給ふ)、赤木文庫本『御曹司島わたり』(「またおくへ下り、秀衡に右のたん／＼かたり給へは、人間にてはましまさずと、崇めをき奉りて、終に平家をほるばし、源氏の世となし給ふ也)、御伽文庫本『御曹司島わたり』(「かくて兵法故日本国を思ひのまゝにしたがへて、源氏の御代とならせ給ひけり)等は、物語の末尾に義経の事跡を極簡略にまとめるが、『義経記』同様に木曾義仲追討に触れない。
- (6) 『義経記』の「腰越状」を含む腰越関連連譚は、覚一本『平家物語』に近く(註3前掲拙論『義経記』に於ける頼朝義経兄弟不和の発端)、恐らく『平家物語』を基にしたのである。
- (7) 古活字本『平治物語』巻下「牛若奥州下りの事」に学習院大学図書館蔵本とほぼ同内容の記述あり。なお敷本勝治氏『義経記』の金売り吉次と陵兵衛』(『国語国文』七九 十一 二〇一〇年十一月、同氏注2前掲書に再録)は、歴史的事

実として陵の清和源氏説を否定する。

(8) 註2前掲論文による。

(9) 『義経記』に於ける前九年合戦と後三年合戦の一体化については、既に日本古典文学大系(岩波書店)等諸注釈書の註に指摘がある。

(10) 川合康氏「武家の天皇観」(講座前近代の天皇)四 一九九五年六月 青木書店。

(11) 『義経記』の成立時期については室町時代以降とする論が定説化している。最近の論考としては谷村知子氏「義経の物語」の受容と『義経記』(同志社国文学)五六(二〇〇二年三月)は、『看聞日記』等から、室町時代前期に『平家物語』に描かれない義経の前半生と後半生に対する興味関心が喚起されていたことを明め、『義経記』成立の時期に迫ろうとしている。拙論はそうした論とも大凡重なり合うものといえるであろう。

(12) 中村和子氏「中世軍記と八幡信仰」(『八幡神社研究』一九八九年五月 叢文社)、三澤裕子氏註2前掲論文、及び註3前掲拙論による。

(13) 古活字本『弁慶物語』・国会図書館蔵元和写本『弁慶物語』も同様に老子とする。

(14) 池田敬子氏「中世人の義経像——文学にたどる——」、樋口州男氏「御霊義経の可能性——敗者から弱者へ——」(両論とも『軍記と語り物』四二二〇〇六年三月)による。

(15) 佐伯真一氏「源頼朝と軍記・説話」(『説話論集』二二 一九九二年 清文堂、同氏『平家物語溯源』一九九六年九月 若草書房に再録)、池田敬子氏「頼朝の物語」(あなたが読む平家物語四『平家物語受容と変容』一九九三年十月 有精堂)による。

引用、または確認したテキストは以下のとおり。『義経記』(『新編日本古典文学全集(小学館)』舞の本「烏帽子折」・「くらま出」・「未来記」) 日本古典文学大系(岩波書店)、学習院大学図書館蔵『平治物語』(『新編日本古典文学大系』古活字本『平治物語』) 日本古典文学大系(岩波書店)、『弁慶物語』諸本(『室町時代物語大成(角川書店)』・『新編日本古典文学大系

『浄瑠璃十二段草子』、諸本・『天狗の内裏』、諸本・『判官みやこはなし』・『橋弁慶』・『じぞり弁慶』、室町時代物語大成、幸若舞曲「くらま出」、幸若舞曲集(第一書房)、平家物語、新日本古典文学大系、源平盛衰記、古典文庫、御書司島わたり、諸本、室町時代物語大成・日本古典文学大系、尊卑分脈、新訂増補国史大系(吉川弘文館)、陸奥話記、新編日本古典文学全集。

追記・本拙稿は、二〇〇九年七月の軍記・語り物研究会企画例会「研究史の検証と展開『義経記』」(於明治大学駿河台キャンパス)での口頭発表を纏めたものである。席上ご教示賜った方々に深謝申し上げます。